

TSURUMI REVIEW

June 2011

No. 41

英語史における *to not V* 語順の衰退と復興 — 文法化理論からのアプローチ —*

宮下 治政・芹川祐理子

英語史における *to not V* 語順の衰退と復興—文法化理論からのアプローチ—

.....宮下 治政・芹川祐理子 1

Sir Gawain and the Green Knight における誓約と名誉

—騎士としての理想と人間的弱さ—長谷川千春 23

MEMENTO における物語構造の役割池田 絢 41

ヘヴィメタルと黒い衣服の記号性長谷川修平 51

卒業研究小論文

Analysis of Techniques in DublinersJun Nakagawa 69*Hair Spray* に見る黒人差別と克服への道のり

—1960年代の社会背景、音楽、文化から読み解く—磯道 彩佳 83

英語の野球用語—日本語との違いについて玉城 一樹 95

卒業研究題目一覧 109

大学院文学研究科英米文学専攻開講科目一覧 113

担当教員一覧 114

英語英米文学科ニュース 115

1. 序論

Quirk et al. (1985: 497, 994) や Huddleston & Pullum (2002: 805f) などの英語の文法書を紐解いてみると、現代英語の否定辞を伴う *to* 不定詞節（以下、否定不定詞）には、2種類の語順、すなわち (1a) のような *not to V* 語順と (1b) のような *to not V* 語順が存在することが分かる¹。

(1) a. I want not to vote.b. I want to not vote.

(久野・高見 (2007: 24))

この否定不定詞の語順バリエーションに関しては多くの先行研究が存在するが、そのほとんどが共時的な観点から分析を試みており、その分析案は言語事実から離反してしまっている。これらの先行研究は大別して、2つのアプローチに分類される。1つは「多義性の回避」という観点から説明を試みるアプローチで、例えば Quirk et al. (1985: 497f) をはじめ、Huddleston & Pullum (2002: 805f)、後藤 (2003: 94, 107)、安井 (2004: 70) などは (2) のような例を取り上げ、(2a) の *not to V* 語順は多義になるが、(2b) の *to not V* 語順は一義になるため、多義性を避けるために後者の語順が用いられると論じている。

(2) a. His hardest decision was not to allow the children to go to summer camp.

(Martin Connolly (p.c.) & Kevin Miller (p.c.))

b. His hardest decision was to not allow the children to go to summer camp.

(Quirk et al. (1985: 497))

鶴見大学英語英文学会

(2a) では、否定辞が (3a) のように主節を否定する解釈と (3b) のように to 不定詞節を否定する解釈の両方が可能になってしまっている。

- (3) a. His hardest decision was not to allow the children to go to summer camp.
b. His hardest decision was not to allow the children to go to summer camp.

これに対し、(2b) には (3b) の解釈しかあり得ない。しかし長原 (2000: 81) は (4) のような例を挙げ、not to V 語順でも一義的な解釈しかあり得ないことを示し、「多義性の回避」が to not V 語順を用いる要因としては強くないことを指摘している。

- (4) The secret is not to panic, keep your nerve and very gradually extend your runs by five minutes each session. (*The Times* (March 5, 1994)/ 長原 (2000: 81))

(4) では、否定辞は明らかに to 不定詞節の to panic を否定しており、主節を否定する解釈は不自然である。さらに not to V 語順の否定不定詞に多義性が生じるのは、主節の動詞が be 動詞の場合にのみ限られ、(1a) のように主節に一般動詞が用いられている場合には多義性は生じない。(1a) には否定辞が to 不定詞節を否定している解釈しかあり得ない。このように「多義性の回避」のアプローチでは、説明され得ない言語事実が残されてしまう。

もう 1 つの否定不定詞の語順バリエーションに対するアプローチは、「解釈の差違」という観点から説明を試みている。例えば野村・Smith (2007: 369f) は、not to V 語順で用いられる動詞句は「動作」もしくは「状態」を表すのに対し、to not V 語順で用いられる動詞句は「状態」のみを表すという一般化を確立している。

- (5) a. Not to have a PhD will make it hard to find a job, so you had better try to finish writing your thesis.
b. To not have a PhD will make it hard to find a teaching job, so maybe you had better try something else. (野村・Smith (2007: 369))

接続副詞 so の後の文脈から判断できるように、(5a) の否定不定詞は「博士号を得ない」という動作を表しているのに対し、(5b) のものは「博士号を持っていない」という状態を示している。さらに、上述の一般化のもとでは、動作を表す述部を否定不定詞の to not V 語順に用いた場合は非文法的になると予想さ

れるが、野村・Smith (2007: 371) はこれを実証している。

- (6) a. He wanted not to corporate with the police.
b. *He wanted to not corporate with the police. (野村・Smith (2007: 371))

しかし野村・Smith (2007) が確立した一般化に例外が存在しないわけでもない。飯塚 (2007: 515) がいくつか反例を挙げている。以下の (7) の例では、動作を表す述部が否定不定詞の to not V 語順で用いられている。

- (7) a. Commissioner Goodlle tells Vick to not show up at camp.
(*The Japan Times* (August 20, 2005) / 飯塚 (2007: 515))
b. It is bad manners to not finish your meal.
(*The Mainichi Daily News* (June 6, 2005) / ibid.)
c. Winthrop turned the wheel to not hit him, went into a big skid and plunged off the cliff and crashed into the sea.
(Sidney Sheldon, *The Sky Is Falling*, Harper Collins, p.194 / ibid.)

やはり「解釈の差違」のアプローチでも、説明され得ない言語事実が残されてしまう。

既述のように、否定不定詞の語順バリエーションに対する共時的観点からの分析・説明は、言語事実から離反し、収束していない状態にある。そこで本稿では共時的観点から通時的観点へと立場を移し、英語の歴史的発達の中で²、否定不定詞の語順バリエーションがどのように生じたのかを考察することで、この事象に説明を与えていく。具体的には、Miyashita (1999) の見解および池田 (2010) の調査を踏襲した芹川 (2011) の観察に基づいて、to not V 語順の歴史的発達は不連続であることを指摘し、初期の英語で観察される to not V 語順と現代英語で観察されるものは性質・特徴が異なるものであることを論ずる。また、現代英語で (散発的に) 現れる to not V 語順は、Lehmann (1995 [1982])、Hein, Claudi & Hünemeyer (1991)、Hopper & Traugott (2003 [1993]) などが提唱する文法化理論 (Grammaticalization Theory) のもと、「再分析 (reanalysis)」および「類推 (analogy)」によって変化した統語構造の副産物であることを主張する。

本稿の構成は以下の通りである。第 2 節では、Miyashita (1999)、池田 (2010)、芹川 (2011) に基づいて、英語史における否定不定詞の語順バリエーションの変

遷を概観し、初期中英語・後期中英語・初期近代英語においては、not to V 語順と to not V 語順に加えて、不定詞（動詞）移動を伴う to V not 語順が存在していたことを示す。さらに to not V 語順は、初期中英語終盤から観察されはじめ、後期近代英語初頭には観察されなくなっているが、約 100 年後の現代英語に突如として復活していることを指摘する。第 3 節では、英語史における to not V 語順の衰退および復興に対して、それぞれ 19 世紀の規範主義 (prescriptivism) の影響および文法化理論のもとで説明を与える。具体的には、初期の英語で観察される to not V 語順はいわゆる「分離不定詞 (split infinitive)」の一例であるのに対し、現代英語の to not V 語順は再分析および類推によって出現した構造であり、統語上の性質・特徴が前者とは異なることを主張する。第 4 節は結論である。

2. 言語事実

電子コーパスを用いた Miyashita (1999: 40ff) の調査によると³、英語史において、否定不定詞の to not V 語順は既に初期中英語で観察されるようになっていく。また、初期中英語では、not to V 語順および to not V 語順に加えて、不定詞（動詞）移動を伴う to V not 語順も観察されている。後期中英語においても、これら 3 つの否定不定詞の語順は存続している。以下は後期中英語の例である。

(8) a. not to V 語順（後期中英語）

for þer wyȝ is set to spuyle and to acusen and not
 for there widely is set to spoil and to accuse and not
 for to helpen hem ne opure men,
 for to help them nor other men
 ‘because it is widely set to spoil and accuse and not to help them or other men,’
 (CMWYCSER, I, 239.66 / PPCME / Miyashita (1999: 40))

b. to not V 語順（後期中英語）

It is good for to not ete fleisch, and for to not drynke wyn,
 it is good for to not eat meat and for to not drink wine
 nether in what thing thi brother offendith
 humiliatlyngly in whatever thing your brother offends
 ‘It is good not to eat meat and not to drink wine, in whatever thing your brother offends humiliatlyngly’
 (1382 Wyclif Rom. xiv. 21 / OED2/ ibid.)

c. to V not 語順（後期中英語）

God, of his grete merci, zeue to vs grace to lyue wel, and
 God of his great mercy gave to us grace to live well and
 to seie the thruthe in couenable manere, and acceptable to God
 to say the truth in suitable manner and acceptable to God
 and his puple, and to spille not our tyme,
 and his people and to waste not our time
 ‘Out of his great mercy, God gave to us grace to live well and to say the truth in a manner suitable and acceptable to God and his people and not to waste our time,’
 (CMPURVEY, I, 56.73 / PPCME / ibid.)

芹川 (2011: 65ff) は、Miyashita (1999: 40ff) の観察に立脚し、古英語から後期近代英語にかけての否定不定詞の語順バリエーションを、電子コーパスを用いて独自に調査している⁴。紙幅の都合上、芹川の調査結果の詳細をここで取り上げるのは不可能であるが、その概略は以下のようになる。

(9)

	not to V 語順	to not V 語順	to V not 語順
古英語	100%	0%	0%
初期中英語	91.4%	2.9%	5.7%
後期中英語	86.0%	2.8%	11.2%
初期近代英語	98.8%	0.2%	1.0%
後期近代英語	100%	0%	0%

(芹川 (2011: 83))

古英語では、to not V 語順および to V not 語順は観察されていない⁵。芹川 (2011: 67f) は Miyashita (1999: 48) の提案にしたがい、以下のように、to V not 語順は不定詞移動によって to not V 語順から派生される語順とし⁶、両方の語順をいわゆる分離不定詞（不定詞マーカーの to と不定詞の間に何らかの要素が介在する不定詞節）の例として扱っている。

(10) [NegP not [TP to [Infp InfP [VP V [NegP not [VP V_{infp}...]]]]]]
 ↑
 (cf. Miyashita (1999: 48))

古英語において to not V 語順および to V not 語順が観察されないという事実は、この時代に分離不定詞が不可能であったことを示唆する⁷。実際に Visser (1966: 1035) も分離不定詞の初出例は 13 世紀に見つかっていると述べていることから、やはり古英語においては分離不定詞は不可能であったようである。

初期中英語に入ると、上述の Visser の観察通り、頻度は低いものの分離不定詞である to not V 語順および to V not 語順が観察されるようになり、後期中英語では両語順の頻度は合わせて 14.0% にまで上昇する。これらの語順は、初期近代英語では衰退し、後期近代英語では完全に観察されなくなる。一見すると、否定不定詞の to not V 語順および to V not 語順は初期の英語では用いられていたが、現在では廃用になってしまった表現のように思える。

しかし 芹川 (2011: 81) は、池田 (2010: 75ff) が行った現代英語における否定不定詞の語順バリエーションに関する調査に基づき⁸、興味深い指摘をしている。池田の調査結果を 芹川 は以下のようにまとめている。

(11)

	not to V 語順	to not V 語順	to V not 語順
現代英語	99.6%	0.4%	0%

(芹川 (2011: 83); cf. 池田 (2010: 75))

散発的ながらも、現代英語では (不定詞移動を伴わない) 否定不定詞の to not V 語順が観察されている。つまり、一旦はその歴史の中から消え去ってしまった語順が約 100 年後に復活しているのである。既述のような否定不定詞の語順バリエーションの変遷を図示すると以下ようになる⁹。

(12)

	not to V 語順	to not V 語順	to V not 語順
古英語			
初期中英語	↓	⋮	⋮
後期中英語			
初期近代英語		↓	↓
後期近代英語			
現代英語	↓	↓	

否定不定詞の語順バリエーションのうち、not to V 語順は古英語から現代英語に至るまで存続している。また、不定詞移動を伴う to V not 語順は初期中英語に出現し、後期近代英語では消失してしまっている。これらの語順の歴史的発達に対して、不定詞移動を伴わない to not V 語順は、to V not 語順と同様に初期中英語に出現し、後期近代英語に衰退しているが、突如として現代英語に再び出現している¹⁰。(12) は否定不定詞の to not V 語順の歴史的発達が不連続であることを示唆する興味深い事実である。次節では、本節で示した言語事実、すなわち英語史における否定不定詞の to not V 語順の衰退と復興に対して、19 世紀の規範主義の影響および文法化理論のもと、説明を与えてゆく。

3. 衰退と復興のメカニズム

前節では、否定不定詞の語順のバリエーションのうち、to not V 語順の存在のみが断続的であることを示した。前節で挙げた (12) の図より、この語順は 3 つの変化、すなわち出現・衰退・復興という変化を経ていることが分かる。このうち to not V 語順の出現は、古英語では観察されなかった分離不定詞が可能になったという事実から説明が与えられる。残りの変化、つまり衰退および復興に関しては、出現とは別の変化であり、独立したメカニズムによるものであると考えられる。そこで本節では、to not V 語順の歴史的変化のうち、衰退と復興を詳しく考察していく。

3.1. 衰退—「19 世紀の規範主義」

Visser (1966: 1036f) や Fowler & Burchfield (1998 [1926]: 736) も指摘しているように、19 世紀には規範文法が台頭し、文法家たちによって、分離不定詞の使用制限が要求されていた。例えば、Alford (1864: 171) や Mason (1881: 181) は次のように述べている。

- (13) a. ... *to scientifically illustrate*. But surely this is a practice entirely unknown to English speakers and writers. It seems to me, that we ever regard the *to* of the infinitive as inseparable from its verb. (Alford (1864: 171))
- b. The *to* of an infinitive mood should never be separated from its verb by an adverb. Such phrases as, [*t*]o rightly use, [*t*]o really understand are improper. (Mason (1881: 181))

(16) 初期中英語から初期近代英語にかけての to not V 語順の統語構造

[_{TP} ... [_{VP} V_{fin} [_{TP} to [_{NegP} not [_{VP} V_{inf} ...]]]]]] (cf. (10))

(16) は、不定詞マーカ―の to と動詞句 (VP) の間に否定辞 (NegP) が介在している構造である。ここで1つの疑問が生じる。現代英語において突如として再び観察されるようになった to not V 語順も、同じ統語構造を持っているのかということである。子供の言語獲得の特性を鑑みると、その可能性は極めて低い。既述のように、子供は大人の発する言語資料に触れることで文法知識を内在化させる。しかし現代英語の母語話者は、約 100 年間存在していなかった否定不定詞の to not V 語順に接することなく、この語順を獲得していることになる。このため、現代英語における to not V 語順が初期の英語のもののように (16) の統語構造を持っているとは考えられない。次に生じる疑問は、現代英語の to not V 語順はどのような統語構造を持っているのだろうかということである。

この疑問に答えるためには、現代英語における (肯定の) 不定詞節の統語構造を検討しておく必要がある。芹川 (2011: 92ff) は、準助動詞の be going to (+ V_{inf}) が be gonna (+ V_{inf}) へと音韻上縮約され得ると同様に、(17) のように定形動詞 + to 不定詞節の want to V_{inf} も wanna V_{inf} へと縮約され得るという事実に基づいて、現代英語の to not V 語順は want + to 不定詞節の連鎖が文法化を経ることによって可能になったと主張している。

(17) a. I want to go home now.

b. I wanna go home now. (Martin Connolly (p.c.) & Kevin Miller (p.c.))

(17a) のような want + to 不定詞節の連鎖が (17b) に至るまでの文法化のプロセスは以下のように示される。

(18) Stage I: want [to V_{inf}]
 ↓ 再分析
 Stage II: [want to] V_{inf}
 ↓ 再分析
 Stage III: [wanna] V_{inf} (cf. 芹川 (2011: 92f))

(18) の Stage I では、定形動詞の want が to 不定詞節を (付加部ではなく) 補部として従えているのに対し、Stage II では、再分析の結果 want to が準助動詞の

ようになり、不定詞を従えるようになっていく。さらに Stage III では、再分析が再び起こり、want to が音韻上/形態上の変化を起こし、wanna となり、現代英語の口語で用いられる形式となっている。仮に (18) において、Stage II から Stage III へ移行せずに Stage II で類推が起きた場合、Stage II の構造が want から他の to 不定詞節を従える定形動詞全般へ拡張 (一般化) することになり、他の定形動詞も準助動詞のように用いられるようになる¹³。

(18') Stage I: want [to V_{inf}]
 ↓ 再分析
 Stage II: [want to] V_{inf}
 ↓ 類推
 Stage IV: [V_{fin} to] V_{inf} (cf. 芹川 (2011: 99))

(18') の Stage IV の構造を持つ to 不定詞 (節) が否定される場合、否定辞は不定詞マーカ―の to の後にしか現れ得ない。というのも、to の前には否定辞が現れる統語上の位置が存在しないからである。さらに、否定辞が仮に to の前に現れる場合は、否定辞の作用域は主節にまで及んでしまう。結果として、否定辞は to の後にしか現れることができない。つまり to not V 語順が生じることになる。このように考えると、現代英語における否定不定詞の to not V 語順は、(18') の Stage IV の構造、より具体的には以下のような構造を持っていると考えられる。

(19) 現代英語の to not V 語順の統語構造

[_{TP} ... [_V V_{fin} to] [_{NegP} not [_{VP} V_{inf} ...]]]] (cf. (16))

(19) と (16) に示されている初期中英語から初期近代英語にかけて観察される to not V 語順の統語構造との大きな違いは、不定詞マーカ―の to の位置である。(16) では to は不定詞節の主要部であるのに対し、(19) では主節の要素となっている。このため否定辞が to の後に現れる場合は、(16) においては分離不定詞の構造になってしまうが、(19) においては否定辞が動詞句を補部とする、もしくは動詞句へ付加されることになり、分離不定詞の構造にはならない。したがって、現代英語で散発的に観察される否定不定詞の to not V 語順は、分離不定詞の例ではなく、初期中英語から初期近代英語にかけて観察される to not V 語順とは統語上の性質が異なる。

現代英語では、(16)のような分離不定詞の構造が19世紀以降と変わらず不可能だとすると、(18)/(18')のStage Iの構造（文法化が進んでいない構造）を持つto不定詞節が否定される場合は、以下の構造しかあり得ず、not to V語順が生じてしまう。

(20) 現代英語の not to V 語順の統語構造

[_{TP} ... [_{VP} V_{fin} [_{NegP} not [_{TP} to [_{VP} V_{inf} ...]]]]]] (cf. (10))

(20)において分離不定詞が不可能であるという仮定のもとでは、否定辞はtoと動詞句の間に介在できず、結果としてtoの前に現れることになる。したがって現代英語でもnot to V語順が生じることになる。以上を踏まえると、現代英語においては、文法化の進度によって、否定不定詞の語順が定まってくるのが分かる。定形動詞+to不定詞節の文法化が進んでいなければ、not to V語順のみが可能であり、逆に文法化が進んでしまうと、to not V語順のみが可能になる。

定形動詞のwantを起点として、これが従えるto不定詞節が文法化を経ることで現代英語のto not V語順が復興したとすると、否定不定詞がwantの補部となっている場合には、to not V語順の頻度が比較的高いと予想される。そこでBNCを調査してみたところ、結果は以下のようになった。

(21)

	want not to V _{inf}	want to not V _{inf}	wanna not V _{inf}
BNC	11例 (78.6%)	3例 (21.4%)	0例 (0%)

定形動詞のwantと不定詞マーカ-のtoが音韻上縮約を起こしているwannaの場合にも(to)not V語順が現れることが予想されるが、この用例はBNCでは見つかっていない。定形動詞がwantの場合でも、やはりto not V語順に比べてnot to V語順の頻度が高いが、(11)に示されるその他の定形動詞一般の場合と比べると、定形動詞がwantの場合のto not V語順の頻度は21.4%とかなり高い。また、BNCを調査した結果では、主節定形動詞がtryやtendの場合と比べても、定形動詞がwantの場合のto not V語順の頻度はやはり高い。

(22)

	not to V 語順	to not V 語順
try	559例 (99.5%)	3例 (0.5%)
tend	190例 (99.0%)	2例 (1.0%)

上述のように、主節定形動詞がwantの場合にto not V語順の頻度が高いことは、現代英語におけるto not V語順の復興が定形動詞のwantを起点に始まっており、want + to不定詞節の文法化がかなり進んでいることを示している¹⁴。では、to not V語順が統語上の性質を変えて、(初期の英語ではなく)現代英語に再び出現する必然性はあるのであろうか。上掲の分析が正しい方向へ向かっているならば、当該の変化は必然的である。OED2が挙げているwannaの初出例は1896年のものであり、want + to不定詞節の文法化とto not V語順の再出現の時期は一致する。前者の文法化が起こって初めて後者の出現が可能になるため、現代英語における変化は当然のことと言える。

以上のように、現代英語における否定不定詞のto not V語順の復興は、文法化理論のもと、want + to不定詞節の文法化(=再分析+類推)を経て可能になるという分析が与えられる。この分析に基づく、初期中英語から初期近代英語にかけて観察されるto not V語順と現代英語で観察されるものでは、その統語構造が異なる。前者は分離不定詞の構造であり、後者は主節定形動詞+to不定詞を従える構造となっている。

4. 結論

現代英語で観察される否定不定詞の語順バリエーションの内、to not V語順の英語史における存在は断続的であることを本稿では指摘した。この語順は、初期中英語から観察され始め、初期近代英語では観察されなくなるが、突如として現代英語に再出現している。文法化理論のもとでは、to not V語順の出現は、現代英語におけるwant + to不定詞節の文法化を経て初めて可能になると分析される。この分析の妥当性は、want toが音韻上縮約を起こしているwannaの英語史における出現時期から裏付けされる。また、この分析では、初期中英語から初期近代英語にかけて観察されるto not V語順と現代英語で観察されるものでは、その統語構造が大きく異なり、前者は分離不定詞の構造であるのに対し、後者は主節定形動詞+不定詞マーカ-が不定詞を従える構造となっている。初期の英語で観察されていたto not V語順がそのまま性質を変えずに、現代英語に復興したという訳ではない。これは子供の言語獲得の観点からも予想されることである。

否定不定詞の語順バリエーションに関する先行研究には共時的観点からのものが多く、その分析案のほとんどが言語事実から離反し、破綻しているため、

本稿では、通時的観点からの分析を与えた。この分析のもとでは、本稿で初めて見出した事実も含めて、否定不定詞の語順バリエーションの歴史的発達には説明が与えられるが、各語順の用法・頻度の違いへの説明とはなっていない。特に頻度に関しては、英語史のどの時代においても、not to V 語順に比べて to not V 語順の頻度がかなり低いことが疑問として残ったままである。現時点では示唆的なことしか述べられないが、概ね次のような理由によるものであると考えられる。初期中英語から初期近代英語にかけて観察される to not V 語順の頻度の低さについては、分離不定詞が完全に発達しきっていなかったところに、規範主義の影響を受けたため、低頻度のまま消失してしまった可能性がある。また、現代英語の to not V 語順の頻度の低さに関しては、want + to 不定詞節の文法化のプロセス中で他の定形動詞への類推があまり進んでいないため、to not V 語順が生起できる統語環境が未だ限られている可能性がある。現代英語の to not V 語順は発展途上中の事象であると考えられる。否定不定詞の語順バリエーションの歴史的発達を踏まえた上での各語順の用法・頻度の差異については、今後の課題としたい。

近年では、文法化と呼ばれる現象が再分析と類推の組み合わせではなく、実は別の観点から説明され得ることを生成文法理論の研究が示している。例えば Kemenade (2000) などは、文法化現象の典型例とされている否定辞のイエスペルセン循環 (Jespersen's Cycle) を原理と媒介変数のアプローチ (Principles-and-Parameters approach) から捉え直している。構造が単純化し意味が希薄化しているような形式は、一見すると (事象としての) 文法化の典型例であるように思えるが、当該の事象に対して、文法化理論のように機能的ではなく、生成文法理論のように形式的に分析・説明を与えることが可能であることを Kemenade (2000) は示している。本稿で提示した現代英語における want + to 不定詞節の文法化を経ての to not V 語順の再出現に対する分析も、原理と媒介変数のアプローチの発展型であり、Chomsky (1995, 1998, 2000, 2001, 2004, 2005, 2007, 2008, 2010) が提唱するミニマリストプログラム (Minimalist Program) の観点から捉え直す余地が残されている。ミニマリストプログラムのもとで分析を与える場合、本稿では言及しなかったが、Wurmbrand (2001) などが取り組んでいる再構築不定詞 (restructuring infinitive) の問題との関連は避けられないと考えられる。こちらの問題についても今後の課題としたい。

注

- * 本稿を執筆するにあたって有益な助言を中戸照恵氏および松田卓也氏より頂いた。ここに感謝申し上げる。また、本稿で提示している例文の文法性の判断に関しては、マーティン・コネリー氏およびケビン・ミラー氏にご教示頂いた。両氏にも感謝の意を表したい。最後に、本稿を *Tsurumi Review* 41 に掲載する機会を設けて頂いた渡辺一美氏に心よりの感謝を申し上げる。
1. 本稿で提示する例文については不要の場合を除いて、否定辞を囲み罫線で、不定詞もしくはこれを含む動詞句を一重下線で、不定詞マーカールの (for) to を二重下線で強調してある。
 2. 慣例に従い、本稿では英語史の時代区分を次のように仮定する。古英語 (Old English: 700-1100)・初期中英語 (Early Middle English: 1100-1350)・後期中英語 (Late Middle English: 1350-1500)・初期近代英語 (Early Modern English: 1500-1700)・後期近代英語 (Late Modern English: 1700-1900)・現代英語 (Present-day English: 1900-)。また、初期中英語と後期中英語をまとめて単に「中英語 (Middle English)」と呼ぶこともある。
 3. Miyashita (1999: 40ff) は、否定不定詞における否定辞の分布を調査する際に、以下の電子コーパスを用いている。
 - (i) 初期中英語・後期中英語
Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English [PPCME] (Kroch & Taylor (1995))
 - (ii) 初期中英語・後期中英語・初期近代英語
Oxford English Dictionary, 2nd edition [OED2]
 4. 芹川 (2011: 65ff) は、否定不定詞における否定辞の分布を調査する際に、以下の電子コーパスを用いている。テキストの書誌情報に関しては、芹川 (2011: 110ff) を参照。
 - (i) 古英語
York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose [YCOE]
(Taylor, Warner, Pintzuk & Beths (2003))
 - (ii) 初期中英語・後期中英語
Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, 2nd edition [PPCME2]
(Kroch & Taylor (2000))
 - (iii) 初期近代英語
Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English [PPCEME]
(Kroch, Santorini & Delfs (2004))
 - (iv) 後期近代英語
Penn Parsed Corpus of Modern British English [PPCMBE]
(Kroch, Santorini & Diertani (2010))

5. Mitchell (1985: 668f) や Traugott (1992: 268) などによると、古英語においては、否定副詞には not ではなく na/no が用いられていた。このため、厳密には否定不定詞のバリエーションの可能性は、na/no to V 語順、to na/no V 語順、to V na/no 語順となるが、議論の展開に支障を来さない限りここでは否定副詞を区別しない。
6. (10) における Infl は不定詞形態素 (-en/-e) を認可する機能範疇である (cf. Kayne (1991: 651), Tanaka (1994: 90)). Miyashita (1999: 47) の分析のもとでは、Infl は D 素性を有し、同じく D 素性を有する不定詞 (形態素) と素性照合の関係に入るために不定詞移動が駆動される。
7. Los (2005: 27) によると、to 不定詞はそもそも補部ではなく目的を表す付加部として用いられており、古英語ではその生起範囲が制限されていたため、原形不定詞と比べて to 不定詞の相対的頻度が低い。そのために、to not V 語順および to V not 語順が観察されないという可能性も残る。この場合は、いわゆる「偶然のあきま (accidental gap)」ということになる。
8. 池田 (2010: 75ff) は、現代英語の否定不定詞における否定辞の分布を調査する際に、以下の電子コーパスを用いている。
 - (i) a. *British National Corpus* [BNC]
 - b. OED2
 池田の調査によると、BNC では not to V 語順が 15,412 件 (99.6%)、to not V 語順が 68 件 (0.4%)、OED2 では not to V 語順が 762 件 (99.7%)、to not V 語順が 2 件 (0.3%) 観察されている。BNC での調査結果は口語体および文語体の英語に生起するものをまとめたものであるが、口語体のコンテキストのみでは to not V 語順の頻度は若干高くなるのではないかと予想される。この調査については、今後の課題とする。
9. (12) における点線は頻度の低さ (10.0% 以下) を示している。
10. 現代英語において to V not 語順が観察されないのは、現代英語では不定詞移動が不可能になってしまっているからであると考えられる。英語史における動詞移動の消失時期は、文献によって差がある。例えば、Roberts (1985: 47) は 16 世紀中頃に動詞移動が消失したと述べているのに対し、Han (2000: 291ff) はこの消失は 17 世紀に起こったと述べている。しかし Warner (1997: 381) にしたがえば、遅くとも 18 世紀には動詞移動は消失しており、現代英語では不可能ということになる。したがって現代英語では、not to V 語順以外には、不定詞移動を伴わない to not V 語順のみが観察されることになる。
11. 19 世紀当時の分離不定詞に対する規範文法家たちの見解の詳細については、Perales-Escudero (2010: 4ff) を参照。
12. 生成文法理論の枠組みにおける言語変化の内的要因に関しては、Lightfoot (1979,

1991, 1998, 1999, 2003, 2006) をはじめ、Roberts (2001, 2007)、Clark & Roberts (1993)、Biberauer & Roberts (2008, 2009) などを参照。ここに挙げた文献では、概ね「媒介変数 (parameter)」という概念を用いて、言語変化の内的要因を説明している。

13. (18') における文法化は、to 不定詞節を従える定形動詞が自動詞の場合の変化であるため、現代英語の to not V 語順は主節定形動詞が自動詞の場合のみに限られると予想される。しかしこの予想に反して、(7a) および (7c) のように、主節定形動詞が他動詞の場合も to not V 語順が可能になっている。これは以下のように、(18') の Stage IV から更に類推が進んだためだと考えられる。

(i) Stage IV: [V_{fin} to] V_{inf}

↓ 類推

Stage V: [V_{fin} Obj to] V_{inf}

また、to not V 語順が主語や付加部として用いられている場合も、(18') の Stage IV から更に類推が進んだ結果だと考えられる。

14. 興味深いことに、主節定形動詞が want の場合は、注 13 で示した Stage IV から Stage V への文法化 (類推) がかなり進んでいるようである。BNC にて want が他動詞として用いられている場合の否定不定詞の語順バリエーションを調査したところ、結果は以下ようになった。

(i)

	Want Obj not to V_{inf}	Want Obj to not V_{inf}
BNC	14 例 (77.8%)	4 例 (22.2%)

定形動詞 want が他動詞として用いられている場合も、to not V 語順の頻度は 22.2% とやはり高い。竹田 (2011: 118ff) は、*New York Times*、OED2、および本稿でも用いた BNC を使用して、tend の助動詞化 (文法化) を調査し、当該表現の助動詞化がかなり進んでいることを意味変化および構造化の観点から論じているが、本稿の調査結果を踏まえると、want + to 不定詞節の方がさらに文法化が進んでいるようである。また Kjellmer (2000: 116ff) も、Cobuild Corpus を用いた try と原形不定詞の共起可能性の調査に基づいて、try の助動詞化が進んでいることを論じているが、既述のように、やはり want + to 不定詞節の方がさらに文法化が進んでいるようである。主節定形動詞が want と tend/try の場合の文法化の進捗の違いは、竹田 (2011) および Kjellmer (2000) の調査と同様に、*New York Times*、OED2、および Cobuild Corpus でも検証されるべきであるが、これは今後の課題とする。ちなみに、文法化の結果生じた準助動詞の be going to (+ V_{inf}) の場合に至っては、BNC では not to V 語順は観察されず、以下のような to not V 語順が 1 例のみ観察された。

(ii) Well I'm going to not necessarily do them first. (FM4, 519 / BNC)

本稿の分析のもとでは、準助動詞の be going to (+ V_{inf}) は、文法化が極端に進んだ例であると考えられる。また、Quirk et al. (1985: 136ff) は、動詞類を助動詞化の度合いに応じて以下の6つの段階に分けている。

- (iii) a. 中核的法助動詞 (central modal)
- b. 周辺の法助動詞 (marginal modal)
- c. 法助動詞用法のイディオム (modal idiom)
- d. 準助動詞 (semi-auxiliary)
- e. 連鎖動詞 (catenative)
- f. 本動詞 (+非定形節) (main verb (+nonfinite clause))

(cf. Quirk et al. (1985: 137))

(iii) の分類では (a) から (f) へ行くにしたがって、助動詞化の度合いが低くなる。この分類によると、準助動詞の be going to (+ V_{inf}) は本動詞 (+非定形節) と比べて助動詞化の度合いが高い、つまり文法化が進んでいるが、本動詞 (+非定形節) のパターンの中でも、上述のように、主節定形動詞が want と tend/try の場合で、文法化の進度に違いが存在することが分かる。本動詞 (+非定形節) のパターンも助動詞化/文法化の度合いに応じて下位分類を行う必要があるが、これも今後の課題とする。

参考文献 (英語)

- Alford, Henry (1864) *The Queen's English: Stray Notes on Speaking and Spelling*, Strahan & Co., London.
- Andersen, Henning (1973) "Abductive and Deductive Change," *Language* 49, 765-793.
- Anttila, Ramio (1989 [1972]) *Historical Comparative Linguistics*, 2nd revised edition, John Benjamins, Amsterdam & Philadelphia.
- Biberauer, Theresa & Ian Roberts (2008) "Cascading Parameter Changes: Internally-Driven Change in Middle and Early Modern English," *Grammatical Change and Linguistic Theory: The Rosendal Papers*, ed. by Þórhallur Eythórsson, 79-113, John Benjamins, Amsterdam & Philadelphia.
- Biberauer, Theresa & Ian Roberts (2009) "The Return of the Subset Principle," *Historical Syntax and Linguistic Theory*, ed. by Paola Crisma & Giuseppe Longobardi, 58-74, Oxford University Press, Oxford & New York.
- Chomsky, Noam (1995) "Categories and Transformations in a Minimalist Framework," *The Minimalist Program*, 219-394, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (1998) "Some Observations on Economy in Generative Grammar," *Is the Best*

Good Enough?: Optimality and Competition in Syntax, ed. by Pilar Barbosa, Danny Fox, Paul Hagstorm, Martha McGinnins & David Pesetsky, 115-127, MIT Press, Cambridge, Mass.

- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels & Juan Uriagereka, 89-155, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," *Structures and Beyond: Cartography of Syntactic Structures, Vol. 3*, ed. by Adriana Belletti, 104-131, Oxford University Press, Oxford & New York.
- Chomsky, Noam (2005) "Three Factors in Language Design," *Linguistic Inquiry* 36, 1-22.
- Chomsky, Noam (2007) "Approaching UG from Below," *Interfaces + Recursion = Language?: Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. by Uli Sauerland & Hans-Martin Gärtner, 1-29, Mouton de Gruyter, Berlin & New York.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero & Maria Luisa Zubizarreta, 133-166, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Chomsky, Noam (2010) "Some Simple Evo Devo Theses: How True Might They Be for Language," *The Evolution of Human Languages: Biolinguistic Perspective*, ed. by Richard K. Larson, Vivian Déprez & Hiroko Yamakido, 45-62, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Clark, Robin & Ian Roberts (1993) "A Computational Model of Language Learnability and Language Change," *Linguistic Inquiry* 24, 299-345.
- Fowler, H. W. & R. W. Burchfield (1998 [1926]) *The New Fowler's Modern English Usage*, Revised 3rd edition, Clarendon Press, Oxford.
- Han, Chung-hye (2000) "The Evolution of Do-support in English Imperatives," *Diachronic Syntax: Models and Mechanisms*, ed. by Susan Pintzuk, George Tsoulas & Anthony Warner, 275-295, Oxford University Press, Oxford & New York.
- Hein, Bernd, Ulrike Claudi & Friederike Hünemeyer (1991) *Grammaticalization: A Conceptual Framework*, The University of Chicago Press, Chicago.
- Hopper, Paul J. & Elizabeth Closs Traugott (2003 [1993]) *Grammaticalization*, 2nd edition, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English*

- Language*, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Kayne, Richard S. (1991) "Romance Clitics, Verb Movement, and PRO," *Linguistic Inquiry* 22, 647-686.
- Kemenade, Ans van (2000) "Jespersen's Cycle Revisited: Formal Properties of Grammaticalization," *Diachronic Syntax: Models and Mechanisms*, ed. by Susan Pintzuk, George Tsoulas & Anthony Warner, 51-74, Oxford University Press, Oxford & New York.
- Kjellmer, Göran (2000) "Auxiliary Marginalities: The Case of *Try*," *Corpora Galore: Analyses and Techniques in Describing English: Papers from the Nineteenth International Conference on English Language Research on Computerised Corpora (ICAME 1998)*, ed. by John M. Kirk, 115-124, Rodopi, Amsterdam & Atlanta.
- Lehmann, Christian (1995 [1982]) *Thoughts on Grammaticalization*, Revised and expanded version, Lincom Europa, München.
- Lightfoot, David (1979) *Principles of Diachronic Syntax*, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Lightfoot, David (1991) *How to Set Parameters: Arguments from Language Change*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Lightfoot, David (1998) "The Development of Grammars," *Glott International* 3.1, 3-8.
- Lightfoot, David (1999) *The Development of Language: Acquisition, Change and Evolution*, Blackwell, Oxford & Malden, Mass.
- Lightfoot, David (2003) "Grammatical Approaches to Syntactic Change," *The Handbook of Historical Linguistics*, ed. by Brian D. Joseph & Richard D. Janda, 495-508, Blackwell, Oxford & Malden, Mass.
- Lightfoot, David (2006) *How New Languages Emerge*, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Los, Bettelou (2005) *The Rise of the To-Infinitive*, Oxford University Press, Oxford & New York.
- Mason, C. P. (1881) *English Grammar: Including Grammatical Analysis*, 25th edition, Bells & Sons, London.
- Mitchell, Bruce (1985) *Old English Syntax, Vol. I: Concord, the Parts of Speech, and the Sentence*, Clarendon Press, Oxford.
- Miyashita, Harumasa (1999) "Verb Movement in Middle English Infinitives," *Linguistic Research* 16, 39-54, The University of Tokyo English Linguistics Association, Tokyo.
- Parales-Escudero, Moisés D. (2010) "To Split or to Not Split: The Split Infinitive Past and Present," Ms., University of Michigan, to appear in *Journal of English Linguistics*.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech & Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive*

- Grammar of the English Language*, Longman, London & New York.
- Roberts, Ian (1985) "Agreement Parameters and the Development of English Modal Auxiliaries," *Natural Language and Linguistic Theory* 3, 21-58.
- Roberts, Ian (2001) "Language Change and Learnability," *Language Acquisition and Learnability*, ed. by Stefano Bertolo, 81-125, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Roberts, Ian (2007) *Diachronic Syntax*, Oxford University Press, Oxford & New York.
- Tanaka, Tomoyuki (1994) "On the Realization of External Arguments in Infinitives," *English Linguistics* 11, 76-99.
- Traugott, Elizabeth Closs (1992) "Syntax," *The Cambridge History of the English Language, Vol. I: The Beginnings to 1066*, ed. by Richard M. Hogg, 168-289, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Visser, F. Th. (1966) *An Historical Syntax of the English Language, Part II*, E. J. Brill, Leiden.
- Warner, Anthony (1997) "The Structure of Parametric Change and V-movement in the History of English," *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemenade & Nigel Vincent, 380-393, Cambridge University Press, Cambridge & New York.
- Wurmbrand, Susanne (2001) *Infinitives: Restructuring and Clause Structure*, Mouton de Gruyter, Berlin & New York.

参考文献 (日本語)

- 飯塚 和雄 (2007) 「〈To not do〉について」, 『英語青年』 2007 年 11 月号, 515, 研究社, 東京.
- 池田 絢 (2010) 「To not V or not to V—不定詞節における否定について—」, *Tsurumi Review* 40, 71-83, 鶴見大学英語英文学会, 横浜.
- 久野 暲・高見 健一 (2007) 『謎解きの英文法—否定』, くろしお出版, 東京.
- 後藤 弘 (2003) 『[改訂新版] 現代英語の文法と語法—実証的研究—』, 英宝社, 東京.
- 芹川 祐理子 (2011) 『英語不定詞における否定の統語論研究—歴史的発達の観点からの考察—』, 修士論文, 鶴見大学大学院文学研究科英米文学専攻.
- 竹田 道代 (2011) 「助動詞化—Tend の場合—」, 『鶴見英語英米文学研究』 第 12 号, 117-132, 鶴見大学大学院英米文学専攻, 横浜.
- 長原 幸雄 (2000) 「不定詞節における not の位置について」, 『英学論考』 第 31 号, 75-99, 東京学芸大学, 小金井.
- 安井 泉 (2004) 「not to do vs. to not do (Question Box 37)」, 『英語教育』 2004 年 10 月号, 70, 大修館書店, 東京.
- 野村 忠央・Donald L. Smith (2007) 「〈to not do〉語順再考 (リレー連載「英文法研究: 理論と事実の接点を求めて」 第 18 回)」, 『英語青年』 2007 年 9 月号, 368-371, 研究社,

東京 .

電子コーパス

- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini & Lauren Delfs (2004) *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English*, Department of Linguistics, University of Pennsylvania.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini & Ariel Diertani (2010) *Penn Parsed Corpus of Modern British English*, Department of Linguistics, University of Pennsylvania.
- Kroch, Anthony & Ann Taylor (1995) *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Department of Linguistics, University of Pennsylvania.
- Kroch, Anthony & Ann Taylor (2000) *Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, 2nd edition, Department of Linguistics, University of Pennsylvania.
- Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner [eds.] (1989) *Oxford English Dictionary*, 2nd edition, Clarendon Press, Oxford. [1st edition by James A. H. Murray, Henry Bradley, W. A. Craigie & C. T. Onions]
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk & Frank Beths (2003) *York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose*, Department of Language and Linguistic Science, University of York.